

漢詩3題：三溪の心象風景を追って

『三溪集』収録の三溪作の漢詩3題について、漢詩分科会のメンバーによる解説の発表がありました。

「新涼」 福田会員



青蘆瑟瑟暮潮生 不是離人也有情
鐵笛誰吹海門月 新涼一夜滿江城

この詩はのちに、第一句を変化させ「金港新涼」と改題して寄贈・寄稿されました。おそらくは横浜の発展を詠んだものです。開港当時は青い蘆が繁り物寂しかったが、あっという間に大きな船も停まれる港が出来て横浜は一変し、港都として新風が吹き始めた、という内容が横浜市歌を連想させます。

「古關雜吟」 藤嶋会員



箱根芦之湯の別荘を中心に、そこに広がる草原や、芦ノ湖、旧関所跡などのモチーフを3首にまとめた詩です。三溪は大正11年に益田鈍翁から強羅の別荘「白雲洞」を譲り受けますが、この詩は秋に入って寂しくなる箱根の自然と歴史を詠ったものです。

日浴靈泉夢亦閑 草蘆結在白雲間
葛衣怕染人間色 九月新涼未下山

別荘ですっかり気分を一新したので山を下りるのに気が進まない。現実的な事業の世界と詩画に遊ぶ文人の世界を両立させる三溪のライフスタイルが窺えます。

「高野山雜吟」 廣島会員



高野山の秋の自然を詠む五言排律です。古い寺に老僧のいる風景や、線香を上げに来た「私」が登場します。この詩からは三溪の実業家としての側面は読み取れませんが、高野山は単なる観光地でもありません。三溪と高野山のつながりと言えば①高野山に寄付を行ったこと②大正10年に開館した靈宝館の建設推進に関わっていたこと③帝室博物館の依頼を受けて赤不動明王画像の出品交渉に行ったこと、などがあります。大正5年から10年までに三溪が何度か高野山を訪れた可能性が高く、この詩の創作年もそのように推定されます。

総括コメント 鄧先生



まだ誰も解題をつけていない三溪の漢詩を、資料を集めながら読み解いていくのは楽しい冒険であり、喜びです。「新涼」は横浜を愛する社会人としての三溪が表れていますが、「古關雜吟」では三溪の姿が自然の中に溶け込み、「高野山雜吟」では自然を詠っています。三溪が56才でまとめた『三溪集』を読み解くと、社会人としての三溪と、自然、つまり宇宙を描く三溪の双方の姿が立ち表れてきます。